

「いらだち」「つらさ」に向き合って



今回は2月末からの支援活動の記録をまとめて掲載しました。このような時間を必要としたのは、いくつかのわけがありますが、最も大きな理由の一つに、「3月11日」から1年という日を迎える時期と重なっていたことです。2月下旬から3月上旬にかけて何回か被災地に行きましたが、至るところでテレビカメラに出会いました。その光景は、ずっと通い続けた者から見ると、非常に特異な光景に見えました。もちろん、そうした報道のすべてを否定するわけではないのですが、こうやって切り取られた映像が番組でどのように意味づけられるのか、気になるところです。ある書物に、「3月11日」という日は、「8月15日」と同じような意味づけをもって歴史に刻まれる必要があるという問題提起がされていましたが、本当に、そのような意味づけをもって語られることになるのでしょうか、それとも、単に「大きな災害のあった日」としてのみ刻印されるのでしょうか、問われるのはこれからなのかもしれません。

【卒業式に向けて】

2月21日、もう一ヶ月前になりますが、米崎中学校に花瓶を届けに行きました。卒業式用の花瓶がないとのニーズを受けて、支援者の方より提供していただいた花瓶を届けました。学校を訪れると、校長先生をはじめ数名の教職員の方が待っていて下さり、地元の新聞に掲載したいとのことで職員室の隣の部屋で簡易「贈呈式」を行い記念撮影を行いました。ところが、そのうち部屋の前には次の授業で使うために小学生が集まってきており、中学校の先生をはじめ支援隊もあわてて部屋を出なければなりません。一つの校舎を小中学校で共有して使っていく日常の不便さを垣間見た気がしました。

続く3月2日には、Ed.ベンチャーの支援者の方から「式花」に使ってほしいという指定の寄付をいただきましたので、それを届けるために小友中学校にも出向きました。ちょうど高校入試前で、学校はまだまだ卒業式というムードではありませんでしたが、震災から1年を迎える時期でも、いろいろなことが積み重なった重苦しい雰囲気を感じました。しかし、一方で、そこには「ここで生きていく」ということを引き受けている強さのようなものも感じたりします。Ed.ベンチャーでは、支援している小中学校8校の卒業式に、教育支援チーム「まつ」と一緒に「祝電」を打ちました。

【久しぶりの学校訪問～「静かないらだち」に向き合って】

3月7～8日は、支援先の陸前高田市の小中学校8校をを久しぶりに訪ねました。今回の目的は、助成元の団体に提出する関係で3月31日までの支援活動を報告書にまとめるため、「支援先からの報告」として各校に原稿を依頼することでした。折しも現地は卒業式直前（中学校は高校入試前日でした）、多忙であることは承知の上でしたが、各校とも依頼に応じて下さいました。ただ、先生方とお話の中では、単なる年度末の多忙さからだけではない「いらだち」が感じられたことも確かです。

一つには、震災後凍結された人事異動が、この年度がわりには確実に行われることに起因するようでした。支援先の学校は、昨春の学校再開後、教室や教材・教具が不足し

ながらも、被災したために生活環境が大きく変わってしまった児童生徒たちの第一の居場所となるべく手探りで学校運営を行ってきましたが、次年度は、職員の移動を伴いながらも進めていかなければなりません。被災していない地域の学校でも年度変わりには大きな変化があるように思いますが、被災している学校には、さらにそれに何か加わった負担が、特に管理職の先生を中心にかかっているようでした。「卒業式が終わったら次は人事で忙しくなりますから。。。と頭を抱えられた校長先生を前に「書けるだけで結構ですから…」と言うしかありませんでした。

そしてもう一つ、「静かないらだち」というべきものが、学校やあるいはおそらく被災地全体を覆っていて、これは「3月11日」直前であるということからきているもののように感じました。単純に「追悼の時期」だからということではありません。この時期日本全体で目にし、耳にした「震災から一年」という言葉と、それにまつわる様々な動きに対する違和感とでも言えるようなものです。「このところ、ボランティアでもマスコミでも、外部からの取材や依頼は、一切断っているんです。職員も対応に疲れてしまっているの、一律受けないことに決めました」「土曜日は支援団体などのイベントがいろいろあるみたいです。市としても追悼式をやるみたいですが…。最近、一年たつということでテレビでまた津波の映像とかやってるけど、見られないっていう保護者の方もいます。これまではいろいろ前に出て『あの日はこうだった、ああだった』と話していた方なんです。でも、今テレビで映像が出たら切っちゃうって」。

津波を経験した地域の人々にとっては、1年は単に過ぎた時間でしかないのかもしれませんが、あの日からすっかり変わってしまった暮らしは、元に戻らないまま、そして次にどうなるかもわからないまま、というのが日常になってしまった人々。3月11日がどういう日なのかは一番分かっている人々。そんな人々が、何か「区切り」を促すように周りで叫ばれる「震災から一年」という言葉に、どう対応していいかわからずただ耳をふさぎたくっている様子が思い浮かびます。「正直、そっとしておいてほしい」。同じように報告書への寄稿を依頼したモビリア仮設住宅の住民の支援をされている方の言葉が象徴的でした。この「静かないらだち」に向き合い付き合っていけるかどうか、私たちが試されているような感じがしました。

【富岡町学校再開支援～子どもの「つらさ」・先生の「つらさ」】

3月7日、富岡小学校から依頼された物資を届けに三春町の小中学校に伺いました。保健室用の衝立はすぐ養護の先生によって保健室に運ばれ、習字道具と小物楽器の確認をして頂いた先生は、「習字道具は来年度の授業のことを考えると本当に助かります」と話されていました。元気にお礼をおっしゃってくれる先生方でしたが、その裏には「つらさ」があることを、久しぶりにお話しした中学校の先生との会話の中で分かりました。

音楽の先生でしたので別棟にある音楽室を案内してもらいながら、途中にある多目的ホールが来週行われる予定だという卒業式場の形に準備されているのを目にしました。

「卒業生は11人です」。そう話された語調は、富岡町に学校があった時では考えられない「少なさ」に対する寂しさと、それでも富岡町の中学校として卒業生を送り出せる感慨とが入り混じっているように感じました。

中学校では、9月の学校再開後継続して学校に通って来ていたにもかかわらず、このところ欠席する生徒が出てきているそうです。そういえば、今回納品した保健室の衝立は、養護の先生によると、不登校の生徒のために間仕切りにするとおっしゃっていました。学校再開後数か月たち、子どもたちや家庭には避難生活による影響が出始めているのかもしれませんが、しかし、家庭の状況までなかなか踏み込めない難しさも学校としては抱えているようでした。町民の避難先では、避難した富岡町民に対する地元の方からの厳しい視線もあるとのこと。そうした中で、「教師」という仕事が確保されている教師たちが、そのような家庭の「つらさ」に介入できるのか、家庭訪問を出来るのか出来ないのか、そのような迷いが先生方の間にも「つらさ」となっているようです。

来年度の授業のためにミシン三台の支援を新たに依頼されました。そこには、つらい迷いの中でも子どもたちのための授業をよりよいものにしようという教師としての責任感を感じました。欠席黒板の生徒の名前を見つめ考える教師がいる限り、支援を必要とする子どもたちのいられる場所はあるのです。Ed.ベンチャーの支援は物資の提供ですが、この場所に関わった以上、先生方がいることによって可能となる子どもの居場所の今後を見続けていきたいと思えます。

【報告1】 2月21日、念願の教育支援チーム「まつ」の事務所を開設しました。旧広田水産高校グラウンドに立てられた仮設住宅の1室です。今後、「まつ」の拠点となると同時に、Ed.ベンチャーが陸前高田市を訪問する際の現地拠点ともなります。

【報告2】 1月の万石浦ライオン学校で、市川富美雄一座に子どもたちが書いた「お礼」の手紙を、一座の公演先である昼神温泉（長野県阿智村）で渡してきました。万石浦に来られた時に一緒ではなかったスタッフの方が、私たちの姿をみて、すぐに「校長先生ですよ」と言われてビックリしました。万石浦公演のビデオと見たとのこと、そして、「本当に行って良かったと、昨日も話が出ていた」とのことでした。この日の公演はおよそ2時間、座長の市川さんは女形を演じておられましたが、公演終了後に、花束と一緒に子どもたちの手紙をお渡しできました。こうして万石浦の子どもたちからの預かりものを届ける任務が終わりました。



【報告3】 万石浦の子どもたちの支援には、いろいろな方の陰からの支えがありますが、そのお一人に、家上とめ子さんがおられます。「家上」というあまり見ない名字からおわかりのように、事務局長のお母さまで福井県在住で兼業農家を営んでおられます。家上とめ子さんは、もう何年も前から、すたんどばいみーの子どもたちの農業体験の場を提供してくださっており、毎年GWに、すたんどばいみーの子どもたちは福井まで田植えに行き、そのお礼にと、キャンプなどで使うお米や野菜を無料で提供してくださいます。今回の支援でも、万石浦でのお昼のおにぎり支援が始まってからは、毎回6升

ほどのお米を炊いておりますが、すべて家上とめ子さんからの提供によるものです。今年も、すたんどばいみーは田植えのお手伝いにGWに出かける予定です。

*****【読者からの感想】*****

今回も東日本大震災通信No.31及び号外有難うございます。

「ドキドキハラハラ」の様子が、文字そして行間からひしひしと伝わってきます。綱渡りの連続だったのです。本当にお疲れ様でした。ご苦労様でした。又、子ども達の喜びと成長ぶりが伝わってきます。「うざい」「死ね！」から「みんな」への心の変わりようが、目に浮かぶようです。「万石浦ライオン学校」の果たした役割はとっても大きいものがあるのです。改めて、敬意を申し上げます。

もう直ぐ大震災から1年、全てのテレビ局で3.11の映像を流していますが、気持ちを新たにいたしております。「通信」により1年間被災地を近くに感じさせていただきましたこと、感謝申し上げます。ありがとうございました。手塚文雄。

【支援隊活動記録 2月25日～3月8日】

■陸前高田 学校支援支援

- 2月21日（第35回）：米崎中「卒業式用花瓶」寄付、「まつ」事務所の物品搬入
- 支援隊メンバー：家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、西岡歩（すたんどばいみー）、甘利悠貴（東京理科大学学生）
- 3月2日（第36回）：小友中「式花」寄付、「まつ」事務所整備、山十さん支払
- 支援隊メンバー：清水睦美（東京理科大学）
- 3月7～8日（第37回）：学校訪問（報告書用文書作成依頼）・現地スタッフ支払・教育支援チーム「まつ」との打ち合わせ
- 支援隊メンバー：家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、今井美里（東京理科大学学生）

■福島県学校再開支援

- 3月7日（富岡町 第8回）：習字道具（19セット、寄付）、衝立（1基、購入）、小物楽器（小太鼓練習台&スティック10、小型グラ1、シェーカー1、スライドホイッスル1、寄付）
- 支援隊メンバー 家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、今井美里（東京理科大学学生）
- ご協力いただいたみなさま（敬称略、順不同、物資・寄付を含む）3/1～3/16
- 式花代、花瓶（大野かよ寄付）○習字セット（ときわ堂寄付）、○小太鼓練習台・スティック、小型グラ、シェーカー、スライドホイッスル（有本真紀寄付）○「まつ」事務所使用の書棚（家上幸子）、キャビネット（Ed.ベンチャー事務所）、机・椅子（柿本隆夫・清水睦美）、権田和子、藤田武志（日本女子大学）、内藤敏夫（内藤材木店）、佐々木亮（東京理科大学）

次年度も形を変えつつ継続的な支援を行いますので、寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

